

子どもアドボカシーの「独立性」がもたらす意義と課題

～児童福祉・教育現場の実践から～

The Significance and Challenges of “Independence” in Child Advocacy: From Practices in Child Welfare and Education

川 上 知 幸

Tomoyuki KAWAKAMI

はじめに

「ママとパパにいわれなくってもしっかりとじぶんからもっともときょうよりかあしたはできるようにするから もうおねがいゆるして ゆるしてください おねがいします」「お父さんにほう力を受けています。夜中に起こされたり、起きてるときにけられたりたたかれたりされています。先生、どうかできませんか。」これらの声は適切に取り扱われることなく二人の幼い命は奪われた。東京都目黒区、千葉県野田市で発生した虐待死事件は記憶に新しいが、子どもが心の底から声を発していたにも関わらず命を救えなかった社会の責任は重い。事件を契機として「子どもアドボカシー」という言葉がクローズアップされ、子どもの声を聴くことの重要性や日本社会がまだまだ子どもの声を拾い切れていない現実に向き合うことになった。とりわけ、関係した児童相談所や学校は矢面に立ち、社会からの厳しい批判にさらされることになったが、一部の関係者を批判するだけでは根本的な解決は望めず、構造的な背景にも目を向けるべきとの指摘もある。

また命を落とすまでは至らずとも、声を発

せずにいる、あるいは発していても適切に取り扱われずに苦しんでいる子どもたちは多く潜在していると思われる。特に、児童養護施設や障害児施設などの児童福祉施設や学校教育現場には、子どもたちが声をあげにくい状況があるとされ、とりわけ第三者性が高く徹底して子どもの立場に立つ「独立子どもアドボカシー」に対するニーズが高まっている。2019年の改正児童福祉法には子どもの意見表明権を保障する仕組みの構築が明記された。堀や栄留らがNPO団体や社会的養護当事者団体など市民と協力しながらイギリスをモデルとした独立子どもアドボカシーを推進し、啓発や人材（アドボケイト）養成の活動が全国に広まっている。同時に、児童養護施設におけるアクションリサーチなど調査研究が進められ、制度化に向けて知見が重ねられつつある。

しかし、実践事例や調査研究報告は未だ少なく、その効果や課題に関する知見は限られている。そこで本稿では、子どもアドボカシーに関する文献を概観し、①児童福祉や教育の現場において子どもの声をどのように受け止め、取り扱われているか現状を整理するとと

もに、②子どもアドボカシーが「独立性」を有することの意義やリスクについて考察し、独立子どもアドボカシーをわが国に導入、発展させるための課題について示唆を得ることを目的とする。

1. 子どもアドボカシーによる意見表明権の保障

わが国においては近年、子どもに対する捉え方が大きく転換されつつある。子どもは保護の対象から権利の主体として捉える考え方が広がっている。1989年に「児童の権利に関する条約（以下、「子どもの権利条約」とする）」が国連総会で採択され、子どもは大人と同様に一人の人間としての権利を持つ存在として承認された。日本は1994年に批准したものの、日本社会においては子どもの権利が十分に守られていないとする国際社会からの批判があり、国連子どもの権利委員会からは度々改善を求める勧告を受けてきた。

2016年の改正児童福祉法に子どもの「権利」が明記されたこと、とりわけ子どもの「意見表明権」に関する内容が規定されたことは国内外から一定の評価を得た。しかし前述の事件をはじめとして、子どもの声を十分に拾い切れてはいない現状も浮き彫りとなり、具体的な仕組みの創設などが求められている。その一つとして期待されているのが「子どもアドボカシー」である。

「子どもアドボカシー」という言葉の意味について堀（2020）は次のように説明している。

子どもの声は小さく、おとなや社会に届かないことが多い。「小さい」とは、「力が弱い」ということを意味する。社会ではどうしても「声の大きい人」、つまり力（権力）のある人の意向で物事が決まっ

ていく。そうした中で、子どもの声は抑え込まれたり、無視されたりしがちなのである。さらに子どもが声を上げたことで、おとなから報復を受けることさえある。このような状況に置かれている子どもの声を大きくして、おとなや社会に届けていく活動が「子どもアドボカシー」なのである。（堀『教育新聞』2020.5.12）

子どもアドボカシーには、一人ひとりの子どもの抱える問題や悩みを解決するために行う「個別アドボカシー」と個別の問題の背景にある社会構造に働きかけ変革を求める「システムアドボカシー」がある（堀 2020）。「個別アドボカシー」が機能することによって社会構造の改善点を見出し、「システムアドボカシー」が機能し制度改革等が進めば、子どもの声に基づいて個々の問題を解決しやすくなる。両者はそれぞれの機能を高め合う関係にあるといえる。

また、子どもの権利条約第12条に規定された意見表明権の「意見（view）」とは、「考え」「希望や要望」だけでなく、その時々「感情」「不満や苦情」などのすべての「思い」が含まれる（堀 2018）。したがって、「子どもアドボカシー」は子どもからの要望や考えの表明を待つのではなく、子どものすべての思いを主体的に聴き、身近なおとなや社会に届けていく活動といえよう。

アドボカシーはその担い手によって5種類に整理されている。親や親戚などの身近な大人による「インフォーマルアドボカシー（非制度的アドボカシー）」、施設職員や学校教員など子どもに関わる仕事をしている大人による「フォーマルアドボカシー（制度的アドボカシー）」、施設で共に生活する子どもや施設を退所した若者など同じ属性や背景をもつ者による「ピアアドボカシー」、市民など利害

関係のない第三者が行う「独立アドボカシー」、そして当事者自身による「セルフアドボカシー」がある（堀 2020, 三菱UFJリサーチ&コンサルティング 2020）。

栄留（2017, 2018, 2020）は、子どもの意見表明権を保障するために「独立アドボカシー」の仕組みを創設することを提案し、イギリスの制度や仕組みを紹介するとともに具体的な実践方法について報告している。その一例としてイギリスで法制化された「子どもアドボカシーサービス Children's Advocacy Services（以下、CASとする）」がある。CASはイギリスで発覚した深刻な施設内虐待を受け、子ども側に立って意見表明・代弁を行う役割として各自治体に設置された子どもの権利擁護機関である。CASの特徴は、既存の児童福祉サービスから独立し「第三者性」を確保していることと、「中立」ではなく徹底して子どもの側に立とうとする点にある。子どもが安心して話せるために、子どもの声を聴き代弁する者「アドボケイト」は、虐待など重大な侵害が及ぶ案件を除き、他の専門職とはあえて情報共有をしない立場を取る。その上で、意思決定者が子どもの声を考慮するよう働きかける。栄留は、子どもの意見表明する能力に焦点を当てるのではなく、「声を上げられるようにするための環境や機会」を整備することが必要であり、アドボケイトの仕組みの創設は意見表明権の保障につながるとしている。

2. 社会的養護領域における当事者参画の課題と子どもアドボカシーへの期待

児童養護施設の子どもたちや施設を退所した若者たちなど社会的養護当事者の中には、特に声をあげにくい状況にある者も多くいよう。家庭内の被虐待経験や障害特性などにより、思いをうまく表現できなかつたり、声を

あげてよいことをそもそも知らなかつたりする子どももいる。社会的養護の領域においては当事者参画という課題について度々厳しい指摘を受けてきた。

児童養護施設で暮らした経験がある香坂（2020）は、説明のない保護や親との強制的な面会、同意のない個人情報の開示など大人主導で物事が決められたエピソードを示し、その後の自身への心理的な影響等についても報告している。「自分の人生に自分がいない」という疑問を呈し、子どもが人生の重要な決定場面に参画できないことの苦しさを当事者目線で述べている。

永野（2019）は、社会的養護当事者の多くは自分の人生のコントロール権を奪われてきた一方で、施設等への措置が解除された途端に同年代よりも早期の「自立」が求められることの難しさを抱えているとし、子どもたちに人生のコントロール権を戻すことの重要性を指摘している。

長瀬ら（2019）は、社会的養護当事者の「参加のしにくさ」に焦点をあて、当事者の声を聴くことの意義について考察している。施設等の退所者を対象とした調査で示される当事者の実態は、当事者全体の状況を示しているわけではなく、調査結果に現れにくい「声なき声」を持つ再困難層が存在するという。再困難層の当事者が社会的排除の状況から脱出するためには、当事者の声を受けとる大人の存在が重要であること、また援助者が良かれと思って立てた援助方針が子どもと合意形成されていない場合は、脱出を阻害する要因になることを指摘している。子どもと利害関係のない、中立的な立場にある大人であるアドボケイトへの期待を述べている。

当事者の声は、たびたび当事者による活動によって拾われてきた。たとえば、わが国においてはCVV（Children's Views & Voice）と

いう社会的養護当事者を中心に構成されるボランティア団体が、施設で生活する子どもや自立した若者たちの声を聴き代弁してきた。CVVはカナダの取り組みを参考に2001年に発足したが、その具体的な取り組みについて団体副代表の中村（2019）が報告している。CVVが掲げるモットー5カ条の一つには「社会的養護の理解を深めるため、社会的養護の当事者の声を集め、発信します。」とあり、団体は社会的養護当事者の声を丁寧に拾ってきた。社会的養護の子どもたちを対象とした自尊感情を高めるワークショップや料理作りなどを提供する「みんなの会」、自立した若者たちに夕食を提供する「よりみち堂」、近況報告を聞きながら悩みなどの声を拾い上げる「ユースプロジェクト」などの事業を行っている。また、それらの声をもとに、講演、出版、ブログ発信などによる啓発事業も実施している。中村は、当事者の声の重要性が認識されつつある今だからこそ、当事者同士がつながり、多様性を認め合いながら声をあげていくことの重要性を述べている。

3. 施設訪問アドボカシーの取り組み

児童養護施設の子どもの意見表明権を保障する取り組みとして「施設訪問アドボカシー」がある。施設訪問アドボカシーとは「アドボカシーについて養成講座を受けた第三者（施設関係者でも児童相談所関係者でもない）が、施設等に定期訪問し、施設入所者の苦情や意見を聴き、要望があれば代弁して改善を求める取り組み」（栄留 2020）である。

栄留（2020）はイギリスの実践を参考に、NPO団体と協働しながら児童養護施設にて訪問アドボカシーを実践し、その成果や課題について報告している。その活動は、単に子どもからあがった声を代弁するに留まらず、子どもの心の声を丁寧に引き出し安心して大

人に伝えられるプロセスを形成している。アドボカイトは施設にて半年程度、遊び等を通して子どもとの関係を構築する。その後、権利啓発を行った上でワークショップなどを通して子どもの声を傾聴し改善の求め方を共に考える「意見形成支援」や「意見表明支援」を行う（堀ら 2018）。その際、アドボカイトは中立ではなく徹底して子ども側に立つ。知り得た声を守秘し、本人に黙って施設側に伝えることはしない。また、大人の勝手な見立てを排除するため、施設職員らと協議して専門職の意見を集約するようなことは原則行わない。独立性や子ども主導の姿勢を貫いている。

この取り組みにより、子どもが普段施設職員に言えないことを声に出せ、生活や自立支援計画に反映されるなどの成果を得たほか、職員側にとっても子どものニーズをより知ることによって支援がしやすくなるなどの効果が報告されている。一方で、徹底した守秘に対して職員からは、改善したいのに子どもから聴いた話を聴けないことを課題として捉える声も出ている（堀ら 2018）。

4. スクールソーシャルワーカーによる子どもアドボカシー実践

現代社会において、学校という教育現場は子どもにとって重要な生活の場であることは言うまでもない。子どもが健全に発達し、社会に生きる力を養い、生きる喜びを感じられるべき場所の一つである。しかしながら、いじめや虐待の問題など子どもの人権が侵害される事象が後を絶たない。冒頭で述べたように、野田市で10歳の女兒が家庭内虐待からのSOSを求める声を学校のアンケートにあげたにも関わらず適切に取り扱われずに命が奪われてしまった事件は、教育現場のみならず、日本社会に子どもの声にどう向き合うかとい

う大きな課題を突き付けた。子どもアドボカシーがさらなる注目を集める契機になった事件でもある。

学校教育現場における子どもアドボカシーについて、大塚（2017）はスクールソーシャルワーカーによるアドボカシー実践とその成果について報告している。大塚は、スクールソーシャルワーカーの使命を「人権と社会正義を基盤に、人権侵害にある子どもの状況を改善し、子どもの生活の質を高めること」とし、子どもアドボカシーをスクールソーシャルワーカーの最も重要な役割と位置づけている。その上で、スクールソーシャルワーカーの立場としてのアドボカシー実践のあり方について言及し、また子ども権利擁護機関のアドボカシーとの相違点についても整理している。

スクールソーシャルワーカーが子どもの思いをアドボケイトし実現するためには、学校教職員との信頼関係が重要であり、その構築のために日々の協働が重視される。また、派遣型のスクールソーシャルワーカーは、当事者と学校の対立構図がある場合は、当事者の思いをアドボケイトする前に学校でケース会議を行い学校の状況理解を整理するところからはじめるなど、事前に学校システムにアドボカシーの下地を作ることが不可欠としている。すなわち、スクールソーシャルワーカーは常に子どもと学校との間で「中立的」な立場をとり、関係者間の関係調整や連携強化を図りながら子どもの声や思いが理解される環境を整える。中立ではなく子ども側に寄り添い、ときに学校と対峙することもある権利擁護機関によるアドボカシーとは区別している。

5. 子どもが発言する（経験を話す）こと のリスク

子どもの声が聴かれることの重要性が再認

識される一方で、子どもが発言することのリスクも指摘されている。たとえば、子どもが自身の経験を話し過ぎ、トラウマを再体験してしんどさを抱えたり、大人たちに語ることを強制されて傷ついたりする場合もあるという。永野（2019）は、日本においては当事者が発言する際の安全性確保に対する検討が十分でないとした上で、米国で取り組まれている安全性確保に向けたトレーニング「ストラテジック・シェアリング」を紹介しながら、当事者（発言者）への対応や聞き手側の声の受け取り方について言及している。

ストラテジック・シェアリングでは、声の聴き手側に対して「当事者になぜ語って欲しいか伝えること」「当事者の語りたいことを尊重すること」「好奇心を満たすための深掘りをしないこと」などについてトレーニングすることによって発言者の安全性を確保する。さらに、声を聴く側だけでなく、声をあげる側にもトレーニングする点が興味深い。

永野（2019）によれば、この取り組みでは、自身の経験を話そうとする当事者たちに、自身のストーリーは自分自身のものであり、話すことは義務ではなく、何をどこまで話すかは自分の安全性と相談しながら決めていくことができることを伝える。ストーリーを語る過程や目的といったすべてをコントロールする感覚を持ち、語らされているのではなく、目的のために望んで語っているという感覚を確認することが重要、としている。

また当事者は、あくまで社会的養護の専門家として、改革に動いてもらうために語るのであって、「かわいそうさ」を売るためではない。「支援したい」と思う人たちであっても、当事者に不遇さを語らせ、同情を集めさせるべきではなく、ましてや、自分たちの事業や支援を大きくするために、当事者の声を消費することはあってはならない、と警告し

ている。

6. 考察

わが国は子どもの権利条約に批准し、児童福祉法（2016）に意見表明権が明文化されるなど、子どもが権利の行使主体であることや子どもの声は聴かれるべきものであるという考え方は少しずつ社会に認知されてきた。しかしながら、社会的養護の領域をはじめとして子どもの声が十分に聴かれていない現状も国内外から指摘されており、掲げられた理念は未だ具現化できていない。そのような中で「子どもアドボカシー」という取り組み、特に独立型のアドボカシーが注目を浴びており、数は少ないものの、一部の児童福祉施設における実践報告や調査研究によって、その意義や課題が明らかにされつつある。本節ではスクールソーシャルワーカーによる学校内のアドボカシー実践と比較しながら児童福祉施設で導入されつつある「独立子どもアドボカシー」の意義について整理するとともに今後の課題について考察する。

1) 子どもアドボカシー実践の「中立性」と「独立性」

「子どもアドボカシー」の実践にはさまざまな形があり、実践のあり方や考え方には違いが認められた。特に、アドボカシーを実践しようとする者が、子どもや子どもが所属する組織（施設や学校）との関係性において、どのような立ち位置にいるかというスタンスの違いは大きい。学校のスクールソーシャルワーカーによるアドボカシー実践では、子どもの声を中心と位置づけながらも、子どもの声を反映させやすくするための手段として学校（教員）側にも積極的にコンタクトしながら関係調整を図るなど中立的な立場を取っている。対してイギリスをモデルとした「施設

訪問アドボカシー」は子どもがより安心して声をあげられるよう、子どもの立場にだけ立ち、施設職員との情報共有も制限するなど第三者性を徹底して担保している。従来の権利擁護機関が子どもからの訴えを前提に動くのに対し、施設訪問アドボカシーでは子どもの声を能動的に聴きに行くという点でも特徴がある。このように一言に「子どもアドボカシー」といっても、実践する機関や職種によって、子どもの声を聴く者のスタンスが異なる。

スクールソーシャルワーカーのアドボカシーが「中立性」を重視しているのは、子どもから声を聴いた後に、その考えや思いを実現するためには学校教職員や家族との協力関係の構築が重要との考えからであった。大塚（2017）は、教職員から信頼されていないなかで子どものアドボカイトをしても、十分に（子どもの）真意を伝えることはできないとし、教職員との日々の協働の姿勢が問われている、と述べている。比嘉（2013）はスクールソーシャルワーカーが置かれている状況として、責任感・使命感の強い学校教員から子どもへの介入に抵抗を示される場合があることや、教員と初期に衝突してしまうと進展できなくなってしまうため、うまく折り合いをつけたり、学校そのものの理解が必要であることを指摘している。子どもの声を丁寧に聴いたとしても、それを実現できず子どもの期待に応えられなければ、逆に子どもを傷つけたり、以後の意見表明への意欲を低減させ兼ねない。声を形にするためには事前の情報共有や支援者間の関係作りなどさまざまな調整を行い、子どもの声を関係者間で適切に取り扱えるような環境、雰囲気を作っておくことが必要なケースもあろう。

しかし、他方で子どもが大人同士の協力関係や繋がっている空気感を感じることで素直な声を出せなくなってしまう場合もある。そ

もそも大人や社会に対して信頼感や安心感を持たずにいる子どもは多く、まして被虐待経験のある子どもなどは自分の声や気持ちが複数の大人に知られることに不安や恐怖を感じることも少なくない。子どもが声を発せなくなってしまうのは、子どもアドボカシーの大前提が崩れる。子どもの声を聴く者が他の関係者と利害関係なく独立している立場であるからこそ、子どもが安心して考えや思いを伝えられる場合もあるだろう。

子どもの声を聴く者が「中立性」を重視するのか「独立性」を重視するのか、立場の違いに対して是か非かを評価するのは困難であり、それぞれに意義とリスクが内包されている。

2) 独立型のアドボカシーの意義

ここで、「子どもの声」とは何か、について考えてみたい。子どもの声を子どもの話す「言葉」そのものと捉えるのか、言葉の裏側にある「思い（声なき声）」と捉えるのか。子どもの権利条約にある「意見（view）」に子どもの感情などすべての「思い」が含まれるとすれば、私たち大人は子どもの言葉から「思い」を正しく受け取らなくてはならない。しかし、「思い」という目に見えないものをどのようにして捉えたらよいのだろうか。「思い」の捉え方の違いが「中立的」か「独立的」かというスタンスの違いをもたらす一つの要因とも思われる。

スクールソーシャルワーカーの実践では、関係者と比較的積極的に情報共有することにより、子どもが声をあげるに至るプロセスやその意味を把握しようとする。つまり、子どもの声以外の情報も積極的に取り入れながら、関係者の協働によって子どもの思いを読み解こうとする。他方で、独立性を重視する施設訪問アドボカシーでは、施設職員など子

ども周辺の大人たちからの情報を遮断し、あくまで子どもの声からその意味を読み解くことを原則とする。ここでいう「声」とは言葉だけでなく表情や仕草など非言語なものも含まれる（堀ら 2018）。そもそも、「意味を読み解く」ことよりも、子どもの声や意見をありのままに受け止め、行動する姿勢を重視している。そのため、出来る限り子どもが真の思いを言葉にできるよう、アドボケイトと子どもとの関係構築から始まる意見形成支援・意見表明支援がプログラミングされ、また守秘が徹底されている。

翻って、子どもの声を聴くことの目的について整理してみると、スクールソーシャルワーカーのアドボカシーは、子どもの権利擁護やエンパワメントの視点を持ちながらも、ケースマネジメントの実践方法としての意味合いが大きい。他方、施設訪問アドボカシーの実践では、問題（苦情）解決に向けた救済機能が含まれてはいるものの、子ども自身の問題解決力、さらには自尊心や自身の生活や人生を自ら創り上げようとする力をエンパワメントすることを徹底して追及している。子どもが抱える問題や課題は子ども自身のものであり、大人が勝手に奪ってしまうことなく子ども自身による意見表明や解決をサポートするという子ども主導の精神がここにも表れている。

子どもの声は小さく社会に届きにくい。であるからこそ、子どもの声を代弁する大人の存在は重要である。しかし、小さく見えづらい子どもの声や思いを大きくし見える化しようとする行為には、ときに子どもの真の思いを別物に書き換えてしまうリスクが伴う。堀（2020）が「セルフアドボカシーは支援者によるアドボカシーが成立する根拠であり、これに依拠することがなければアドボカシーはパターナリズムに転嫁し、子どもの依存と無

力化をもたらすものになりかねない」と警告しているように、大人の勝手な解釈によって声が捻じ曲げられてしまえば本末転倒であり、アドボカシーはパターンリズムに瞬時に成り代わる裏表の関係にある。「セルフアドボカシーに依拠し、当事者のエンパワメントにつながるものだけが真のアドボカシーである」という堀（2009）の言葉は、子どもの力を信じる姿勢の表れであると同時に、大人の力に限界があることを謙虚に認めようとする真摯な態度でもあるといえよう。そして、このような大人の姿勢や態度に触れながら、子どもは少しずつ自分の力や社会への信頼を取り戻すのではないだろうか。そういう意味では、施設訪問アドボカシーのような子どもの立場にだけ立つ独立型のアドボカシーは、真のアドボカシーを追求する実践と言え、日本の多くの子どもたちにそのニーズがあるものと思われる。

3) 独立型のアドボカシーの課題 ～施設訪問アドボカシーに焦点をあてて～

子どもの声に徹底して耳を傾ける大人の姿勢によって、子どもが安心と期待をもって声を発せられるようになれば、子どものその後の生活や人生にとって有益となるに違いない。しかし結果として子どもが期待する変化が得られなかった場合は、失望し自尊感情がさらに低下してしまう危険も指摘されている（堀ら 2018）。であるからこそ、アドボケイトはときに子どもの声が軽んじられていると思われる場においては、子どもの声を考慮するよう強く主張する。

しかし、施設や学校など多くの子どもが集団で生活する場においては、声と声、権利と権利が対立し両立が困難な状況も起こり得る。また、福祉や教育現場の人手不足の問題など子どもの声を十分に反映させられる環境

が大人側に十分には用意されていないという構造的矛盾が内在している場合もある。このような中で、現場にて子どもと向き合う大人たちが既に子どもの声に耳を傾け、その実現のために全力を尽くしていてもなお、子どもの「思い」が満たされずに発せられる声も少なくないと思われる。ともに生活をする子どもたちそれぞれが様々な声や権利を有している。そこに働く大人（職員）の権利も絡み合う。誰かの声や権利に偏りすぎずに全体の利益を調整することも、一人ひとりの権利を守る行為といえる。

限られた資源の中、さまざまな権利の狭間で、少しでも多くの権利を守ろうと泥臭くぎりぎりの調整を図っている大人とそれを影ながら理解し支える子どもの存在がありはしないだろうか。それらの努力によってある種の均衡が保たれ子どもや職員の安全が守られている側面もあるとすれば、そこに外部からのアドボケイトが介入することによる一抹の不安を施設職員が抱えるのも自然といえる。徹底して一人の子どもの立場に立つアドボケイトと全体の利益を考えざるをえない施設側が対立関係に陥る懸念が施設職員からも語られている（堀ら 2018）。両者がどのように融合していくかは大きな課題である。

もちろん、前述したように子どもの声を期待通りに実現させることだけがアドボカシーの目的ではない。実現しなくとも真摯に声を聴かれ、意見形成や表明のサポートを受ける体験そのものが子どものエンパワメントに繋がり得るからである。そして、エンパワメントされた結果、期待通りの変化が得られずとも建設的に周囲と折り合いをつけながら自己解決できるようになることも期待され、それは職員をも守ることになる。

しかし、さまざまな裏切られ体験に傷ついてきた子どもの中には、エンパワメントされ

るまで心が回復しておらず、さらなる喪失体験として刻まれる者もいよう。また、永野（2019）の報告からも、聞き手に過去の傷つき体験を語らせる意図がなかったとしても、様々な声が聴かれる過程で子どもが必要以上に話し過ぎたり、トラウマ体験が想起され傷ついたりすることも想定される。声を反映させられる環境やアフターケアの体制が整わない段階で子どもの声を聴くことには、子どもにも身近な大人にもリスクが伴う場合があるのではないだろうか。子どもの声の背景や意見を反映させられる見通しを事前に評価しておくべきケースもあると思われる。

多くの場合、子どもが声をあげるに至る問題の根本原因はシステミック（制度的・構造的）なものである（ダーリンブル 2019）。子どもの声が十分に聴かれない背景には、「忙しくてゆっくりと聴くことができない」だけでなく、子どもの声を聴くことの困難や怖さを知る大人へのサポート環境が整えられていないという構造的な問題も存在すると思われる。子どもの声は、ときに身近な大人の声や想いを代弁している。こういった観点からも、独立子どもアドボカシーの意義を感じるところであるが、子どもの声から制度的なシステムアドボカシーを実践し成果を得ることが期待される。

4）独立子どもアドボカシーを支える土壌を整備する

イギリスには、子どもコミッショナー（Children's Commissioner）という国レベルの独立した子どもの権利擁護機関がある。政府、議会から独立し、子どものための政策改善を求める強い権限が与えられている。子どもの声を聴き個別救済を行うこともあるが、公正中立な立場から様々な調査・研究を行いシステミックな問題を明らかにして政策提言を行

うことを主としている。アドボケイトや独立アドボカシーサービス提供機関は子どもの権利を守るために身近な支援者らに働きかける。子どもコミッショナーは身近な大人たちが無理なく安全に子どもの声を聴ける（反映させられる）よう制度・構造改革を国に働きかける、いわば身近な支援者らの権利を守る機能も果たしていると考えられる。身近な大人や支援者が守られる環境を整備することは、独立子どもアドボカシーの受け入れを促し、また子どもの声が聴かれ反映される機会を増やすことに寄与すると思われる。

また、同国のチャリティ団体「バーナードズ Barnardo's」のケアリーヴァー支援活動に見られるように、子ども・若者と（独立）アドボケイトの周りにはトレーニングされたソーシャルワーカーや各種アドバイザー、ボランティアなどが協を固め、子どものニーズを満たし、支援者をも支える強力なネットワークが構築されている（上村 2020）。質の高い支援者チームによる、子どもの声を反映させる高い調整機能が裏付けとしてある。であるからこそ、アドボケイトは独立した立場で徹底して子ども側に立ち、声を聴き代弁するという役割に集中できるのかもしれない。

比して日本の状況はどうであろう。自治体レベルの権利擁護機関はあるが、子どもコミッショナーのような国レベルの強力な権限を持つ機関はまだ存在しない。また、児童相談所をはじめとしてケースマネジメントを展開するソーシャルワーカーの量と質の問題が顕在化しているほか、多職種連携の課題も浮き彫りとなっている。

アドボケイトが真に子どものためだけのアドボカシーを実践するためには、アドボケイトが得た子どもの声をケースマネジメントに、またシステムの改善に反映させられる中立的な専門職や機関の高い専門性が不可欠と

考える。①徹底して子どもの立場に立ち子どもの声や思いを拾うアドボケイト、②子どもの思いを実現させるための高いソーシャルワーク機能を備えた支援者チーム、③システミックな問題を明らかにして制度・構造改革に強い権限を持って切り込む機関。これら3つの役割は相互補完的な関係にあり、いずれも欠かすことのできないものと考えられる。また、それらを担う各種人材の育成も急務である。効果的かつ安全に独立子どもアドボカシーを推進するためには、包括的な改革が求められる。

おわりに

いじめや家庭内虐待から「助けて」の声を発しても適切に取り扱われず命を失ってしまう子どもたち。保護されてなお、施設内で被措置児童等虐待に苦しむ子どもたち。残念ながら、子どもの声が軽んじられている状況は未だわが国の至るところに存在している。子どもアドボカシーは埋もれている子どもの声を拾い、命や心を守る実践である。また単に個の問題解決に留まらず、子どもが主体的に生きる力を育む。声を丁寧に聴かれる経験をもつ子どもはやがて次世代の子ども声を聴く大人になろう。子どもアドボカシーは、わが国を子どもが真に権利の主体として生きられる社会へと導く極めて意義深い取り組みといえる。今後わが国においてその仕組みが整い、文化として定着しさらに発展することが期待される。

一方で、軽んじているのではなく、子どもの声の重みを痛いほど知っているからこそ、声を受け止められないでいる身近な大人たちもいよう。子どもの声や権利は最前線で向き合う一部の大人たちに託されるのではなく、その重みを皆で分け合える仕組み作りが必要である。子どもの声を聴くことへのリスクへの

対応や、子どもの声を現実的に反映させられる人材や仕組みをマイクロレベルからマクロレベルまで整えるという大きな課題をクリアしなくてはならない。

昨今、子ども家庭福祉の国家資格や「子ども庁」の創設が議論にあがっている。そこでは子ども虐待対策や貧困対策等の強化や効率化に主眼が置かれており、子どもの権利擁護にコミットされた仕組みとなるかは不透明である。子どもの権利のために、子どもの声を社会に届けるために機能するシステムの構築に向けて議論が進むことを期待したい。

本稿では、スクールソーシャルワーカーの実践と施設訪問アドボカシーの実践を「中立性」「独立性」の観点から比較し、独立子どもアドボカシーの意義や課題について述べてきた。しかし、検討材料とした実践は限定的であり、実際にはもっと多様なアドボカシーが実践されていると思われる。また、「中立」「独立」の定義はあいまいであり、それぞれに多様な形が含まれていると思われるが、検討、整理はできていない。今後はより多様な子どもアドボカシー実践を把握し、わが国における子どもアドボカシーのあり方についてさらなる検討を重ねたい。

文献

- 榮留里美 (2017) 「イギリスの子どもアドボカシーの取り組みと日本への導入可能性」『世界の児童と母性』82, 52-56
- 榮留里美 (2018) 「英国における独立子どもアドボカシーの実践方法に関する研究－施設訪問アドボカシー実践者へのインタビュー調査を通して－」『福祉社会科学』10, 1-15
- 榮留里美 (2019) 「イギリスのアドボカシー制度と国内における訪問アドボケイトの取り組み」『子どもの虐待とネグレクト』(21) 1, 46-54
- 榮留里美 (2020) 「施設訪問アドボカシーの取り組みについて」『世界の児童と母性』88, 23-27
- Haydee Cuza (2019) 「当事者参画に力をそそぐ－

- 子ども家庭福祉システムを愛情に基づいたもの
に変革するために－』『子どもの虐待とネグレ
クト』(21) 1, 32-45
- 比嘉昌哉 (2013)「スクールソーシャルワーカー
のアドボカシー機能遂行のプロセス－子ども支
援に焦点を当てて－」『沖縄国際大学人間福祉
研究』(10) 1, 1-18
- 堀正嗣編著 (2018)『独立子どもアドボカシーサー
ビスの構築に向けて－児童養護施設と障害児施
設の子ども職員へのインタビュー調査から－』
解放出版
- 堀正嗣 (2020)「子どもアドボカシーとは」『世界
の児童と母性』88, 7-12
- 堀正嗣編著 (2020)『子どもの心の声を聴く』岩
波書店
- 上村千尋 (2020)「英国におけるケアリーヴァー
政策と実践－子ども・若者の権利保障を基盤と
した社会変革の歩みを探る－」『金城学院大学
論集 社会科学編』(16) 2, 138-150
- 上村千尋 (2020)「英国のリービングケアにおけ
る支援の継続性－社会的養護を離れる若者の選
択の権利と「つながり」の保障－」『立命館産
業社会論集』(56) 1, 49-61
- 川瀬信一 (2019)「『新たな当事者』の登場とこれ
からの当事者参画」『子どもの虐待とネグレ
クト』(21) 1, 22-31
- 香坂ちひろ (2020)「社会的養護に当事者参画を
－子どもたちが『自分の人生に自分がいない』
と感じなくて済むように－」『世界の児童と母
性』88, 47-51
- 三菱UFJリサーチ&コンサルティング (2020)「ア
ドボケイト制度の構築に関する調査研究 報告
書」[https://www.murc.jp/wp-content/uploads/2020/](https://www.murc.jp/wp-content/uploads/2020/04/koukai_200427_7_1.pdf)
[04/koukai_200427_7_1.pdf](https://www.murc.jp/wp-content/uploads/2020/04/koukai_200427_7_1.pdf), 2021.5.17
- 正木遥香 (2020)「子どもの権利擁護に向けた啓
発講座の実践－2018年度大分大学公開講座『子
どもアドボカシーって何だろう?』報告－」『大
分大学高等教育開発センター紀要』12, 89-94
- 永野咲 (2019)「日本における当事者参画の現状
と課題」『子どもの虐待とネグレクト』(21) 1,
8-14
- 長瀬正子・谷口由希子 (2019)「社会的養護の当
事者の『声』」『子どもの虐待とネグレクト』(21)
1, 55-62
- 中村みどり (2019)「日本における社会的養護当
事者活動の15年と課題」『子どもの虐待とネグ
レクト』(21) 1, 15-21
- 大谷美紀子 (2020)「『子どもの権利条約』浸透に
向けての日本の課題」『世界の児童と母性』88,
19-22
- 大塚美和子 (2017)「スクールソーシャルワーク
の実践展開3 子どもアドボカシー」『ソーシャ
ルワーク研究』(43) 3, 54-61
- 高橋直紹 (2020)「『子どもの手続代理人』を超え
て『子どもの代理人』へ－子どもの最善の利益
のために－」『世界の児童と母性』88, 42-46
- 薬師寺真 (2020)「子どもの権利の実現に向けた
児童福祉実践活動－保護される権利と参画する
権利の緊張関係の狭間で考えたこと－」『世界
の児童と母性』88, 13-18
- 山口亮子 (2020)「アメリカのCASA/GAL制度に
みる子どものアドボカシー」『世界の児童と母
性』88, 57-61
- 吉田恒雄 (2020)「わが国における子どもの権利
と権利擁護をめぐる－立法等による対応の推
移について－」『世界の児童と母性』88, 2-6